



私が夫の故郷である福岡市に住んでいたのは、去年の6月までの約2年間だった。福岡へ移転するまでの私は生まれ故郷の両親も好きだが、20年間暮らし慣れた東京もそれなりに住みやすいと信じていた。でも、そんな思いは福岡市に住み始めて、みごとに消え失せた。

空が青く澄んでる。海の水が透明に近いコバルトブルー。そして、いつも風が流れてる。東京では失われた自然が、この街には当たり前のように広がっていた。ある時、公園の芝生に手足を伸ばして寝転がってみた。驚くほど芝生が柔らかくて温かい。青空がどこまでも広がっている。草の匂いがする。どこかで潮の香りのする風が流れてる。目を閉じると私だけしかない。周りの人のざわめきが一瞬にして消え、私だけの世界。大地はこんなに温かくて優しくかったのかと思うと涙があふれた。自然が限りなく優しく思えた。こんな感覚をずっと忘れて、それでも平気で生きていた。東京に住んでいるうちに忘れ去った何かが心の中によみがえっていた。

私は福岡の街中を夫と2人でMTB（マウンテンバイク）に乗って走り回った。一日に20キロなど平気だった。天神のビル街を抜け、大濠公園のベンチで休み、百道浜で夕日を眺める。時には渡船にMTBごと乗り込んで志賀島へ渡り、勝馬の海岸で玄界灘を眺めながら多生で昼寝。こんなぜいたくはない。

自然のなかに東京に勝るとも劣らないほどの大都会がある。求めなくても、深さなくとも、自然はあたりまえの優しさですぐそばにある。私のなかに人間と自然は何か別の存在だという思いがあったが、あのふわふわの芝

風の流れる都会、福岡

中村 亜紀子 Akiko NAKAMURA
東京都町田市

生に寝ころんでみて、私も自然だったと、人間も自然の一部だったと思いついた。

いつまでも風の流れる街でいてほしい。そして、何年後かにもう一度

私が福岡市で暮らせる日まで、優しい自然の風の流れる都会でいてほしい。

地元の人にはなかなか気が付かない魅力、「風の魅力」に好感が持てた。水系と緑系の自然の世界に風系を入れ、自転車ですつと走る一日行動圏としての福岡のぜいたくさが見事に表現されている。(選考委員 竹下 輝和)

